【書評論文】

北アイルランドにおけるプロテスタント労働者階級のアイデンティティ形成

James W. McAuley, *The Politics of Identity*

大渕　敦子
OBUCHI Atsuko

1．はじめに

北アイルランド紛争は、多数派であるプロテスタント教徒と、それに抵抗する少数派カトリック教徒との間に起こった「宗教紛争」であるといわれる。しかし、異なる宗派を信仰する者同士の争いは、教義上の対立のみが紛争の要因であるわけではなく、常に経済的な利害の対立がある。北アイルランドでは、プロテスタントが宗教上の教義の対立を表向きの口実にし、経済的利益を独占するためにカトリックを差別してきたといわれる。

紛争の背景には、まず英国によるアイルランドの植民地支配を発端とする、両国の歴史的対立がある。そのため、紛争を単なる宗派コミュニティ間の対立だととらえることはできない。ＩＲＡ（アイルランド共和軍：カトリック系の過激派組織）は「北アイルランドを不当に占領している」英国政府を標的にテロ活動を行っているのであり、プロテスタント・コミュニティを標的にしているのではない（O'Duffy　1995：743)。さらに二つのコミュニティの成員は、宗派以外にも民族的出自が異なっている。ただ、宗派はエスニシティを代表しているのである。また、紛争をより複雑にしてきた要因には、各宗派集団内における、階級間の政治的・経済的利害をめぐる覇権争いがある。

この小論では、プロテスタント労働者階級を修正マルクス主義の立場から分析した、ジェームス・W・マコーレー著『アイデンティティの政治学：ベルファストのロイヤリスト[1]・コミュニティの研究』をとりあげる。本著作では、導入部で従来の左派の理論的枠組み（正統マルクス主義学説）による北アイルランド社会の分析への批判に大きくページが割かれている。修正マルクス主義の優位性を主張する彼は、後半のコミュニティ調査からの分析でそれを立証し、結論では、集団から個人へ視点を移してコミュニティ成員の主体性に着目し、プロテスタント労働者階級のアイデンティティ形成の問題を論じている。

ここでは、まず北アイルランド社会の歴史的背景と左派の理論的枠組みをふまえた上で、彼の行ったプロテスタント労働者コミュニティにおける調査と分析を紹介、その後で著者の主張とそれに対する疑問点の提示を行い、最後にプロテスタント労働者階級のアイデンティティの問題について考察してゆきたい。

2．修正マルクス主義による民族紛争の分析

左派の民族紛争理論には、マルクス主義の正統派と修正学派がある。正統マルクス主義の立場をとる研究者からは、英国による帝国主義支配が紛争の長期化の原因であり、北アイルランドが英国領でなくなることが、紛争解決の前提だと考えられている。また彼らの主張では、プロ

テスタント労働者階級は、「労働貴族」としてプロテスタント支配階級から職や住居の保障を約束され「限定された」特権を享受することで、プロテスタント支配体制の維持に貢献してきたことになっている（McAuley　1994：2, 15-17, 175-176)。

確かに、プロテスタントはカトリックよりも相対的に裕福である。しかしここで留意すべきなのは、北アイルランドにおいて、「階級間の経済格差が大きいために、宗派間の格差よりも宗派コミュニティ内部の格差の方がはるかに大きくなっているということである。・・・純粋に数の上だけでいえば、最低所得者層には、プロテスタントの方が多く含まれている（Boyle and Hadden　1994：54)」点である。

こうした背景には、1972年の英国による直接統治の開始以来、カトリックに対する差別が是正されるにつれてカトリックの中産階級化がすすんだことがある。宗派間の経済格差は年々縮小傾向にある[2]。つまり、プロテスタント労働者階級とカトリック中産階級が併存する状況は、正統マルクス主義学説の限界を示している。英国政府がゲリマンダリングを廃止してカトリック議員の数を増やし、職業や住宅、公的サービスの提供においてカトリックへの「積極的な差別是正」措置を行う一方で、プロテスタント労働者は、彼らの伝統的な就職口であった、造船などの製造業の衰退による失業問題に直面し、自分たちが孤立し、取り残されたような感覚に陥っている（Parker　1994：297, 329-333)。また将来の北アイルランドの憲法上の帰属をめぐっても、彼らは不確定な状況にあり、これは後述するような彼らのアイデンティティの変動に大きく影響していると考えられる。

正統派が指摘するような宗教と階級の相関は、英国の直接統治開始以前の北アイルランド、つまりユニオニスト支配体制の時期までは、ある程度認められていた。松尾（1980：202-214）は、東部と西部の地域格差が宗教的格差であり、さらに北アイルランドの対外依存的・偏倚的経済発展が生み出した階級的利害の対立が、宗派間対立として表れているとし、経済と宗教の相関を指摘している。プロテスタント都市を縫うようにして沿岸部に道路や鉄道網が発達していることは、過去に入植者の多く住む地域を優先して開発が進められてきたことを意味する。修正学派は、こうした資本主義の偏った発展形態が、それぞれの地域に特有な歴史的背景に基づいて紛争を引き起こしていることを認識した上で、民族紛争を、資本主義社会の構造的矛盾や、純粋な階級意識に完全に還元することはできないとする見解で一致している（Solomos　1986：104)。

マコーレーは、これまでの正統派の主張する、プロテスタント労働者階級は労働貴族であるという見方に対し、それは北アイルランドでの「資本主義体制の発展段階で一時的に存在したもの」であり、「正統派は1890年代の社会・政治的関係を1990年代に置き換えている」にすぎず、「状況は刻々と変化しているにもかかわらず、彼らの分析には柔軟性がない」と手厳しい批判を加えている（McAuley　1994：2, 25-26)。エスニシティは「虚偽意識」であり、異なるエスニック集団に属する労働者階級が団結して階級闘争を行うことで消滅するとした正統派の主張に対し、修正学派のエスニシティ理論は、階級を念頭に置きながらも、エスニシティが、対立する集団にとって「虚偽意識」として一蹴することのできない一定の帰属意識を生じさせる、と認めている。それでも、階級を第一義的に、エスニシティを第二義的にとらえようとする姿勢に、同じマルクス主義学派として正統派と共通する

視点が継承されている。

3．イデオロギーと世界観の形成

次に、マコーレーの行った調査と分析についてみてゆきたい。インタビュー調査の対象となったコミュニティは、ベルファスト市東部に位置する「バリマック」地区（仮名）である。北アイルランドでは、宗派・階級別「棲み分け」が紛争の長期化によって深刻化している。バリマック地区も例外ではなく、圧倒的にプロテスタント労働者が多い地区である。また、この地区は、成員の転出入が少ないことも手伝って、文化的均質性を有した伝統的な造船コミュニティが残存している（McAuley　1994：41-47）。

コミュニティの政治的志向を体現する組織としては、強硬派の「民主ユニオニスト党（ＤＵＰ）」が主にその役目を担っている。ＤＵＰの特徴は、支持基盤が農村部の保守的な中間層と都市の労働者との二つにあることで、これはＤＵＰの、「憲法を堅持する（北アイルランドの憲法上の地位の変更を認めない）という意味においては右寄りだが、社会政策にかんしては左寄り」（McAuley　1994：60）という基本的立場を反映している。しかし、バリマック地区における高いＤＵＰ支持率は、こうしたポピュリスト的姿勢だけからくるものではない。むしろ、絶対にダブリン政府のアイルランド問題への介入を認めない、強固な「アルスター（北アイルランド）の防衛」という旗印のもとに築かれている。ここに、プロテスタント労働者が、コミュニティの要望に見合う政治組織として、労働党よりもＤＵＰを選択した理由の一部を求めることができると思われる。

ところで、70年代から80年代にかけての北アイルランドは、貧困地区における住宅改善要求の運動と、政府の都市再開発計画が連続した時期である（McAuley　1994：122-147）。マコーレーは結論において、アルチュセールによるイデオロギー論を念頭に置きながら、バリマック地区の再開発計画に対する労働者の反応を通して表出する、プロテスタント労働者階級の「世界観」を生み出していると思われるイデオロギーを、以下の４つに分類しているので、順に見てゆきたい（McAuley　1994：176-181）。

まずは宗派イデオロギーであるが、バリマック地区には、カトリック労働者居住区の「飛び領土」が隣接している。プロテスタント労働者は、自分たちのコミュニティよりも居住状況の改善が優位に進められている（と彼らの「世界観」では解釈できる）カトリック労働者地区と、再開発の状況を比較対照しながら、自らの住宅問題を理解する。この場合、宗派が集団意識を形成している。

また、再開発によって住民が郊外に流出しはじめると、住民の間からコミュニティの崩壊を危惧する声が聞かれるようになった。80年代は核家族化がすすむと同時に、失業・犯罪などの社会問題がさらに噴出した時期でもあり、コミュニティの崩壊は、地区の再開発の問題に限らずより一般化された文脈で住民によってとらえられた。たとえばバリマック地区に住む女性は、こう嘆いている。「バリマックにいま必要なのは、隣人付き合いを続けてゆくことだわ・・・昔なら皆が世間話をするためだけに、近所の家を行き来していたのに・・・」（McAuley　1994：127）。住宅問題を通して、プロテスタント労働者階級は伝統的なコミュニティを守る必要性も感じており、コミュニティ・イデオロギーも集団アイデンティティを形成している。

そして、階級イデオロギーも彼らの集団意識

を形成する。「労働者によりよい住宅を」というスローガンのもとで、この時期、他の英国の都市でみられた現象と同じように、バリマック地区でも既存の政治家に頼らない、住宅問題に焦点をあてた自発的な住民組織が幾つか生まれた(McAuley　1994：122-123)。プロテスタント労働者階級は、ベルファスト市の都市計画担当局やユニオニスト支配層からの抵抗に遭いながら、宗派主義のために限られた範囲内ではあるが労働者階級の要求を通してきた。

最後に国家イデオロギーがある。もともとカトリックは出生率が高い上に、カトリックへの差別是正による移民の減少で、少しずつであるが北アイルランドでは確実にカトリック人口の増加がみられている。バリマックの住民は、隣接するカトリック地区の人口が増加し、境界を越えてプロテスタント地域を侵食してくる「脱プロテスタント化」現象に恐れおののいている。さらには、カトリックが意識的にコミュニティの乗っ取りをたくらんでいる、英国政府が再開発の名の下にそれを支援している、といったかなり飛躍した受けとめ方もみられ（McAuley 1994：129-130)、アルチュセールのいう「世界観」と現実との乖離が起こっている。しかし実際に「脱プロテスタント化」は進行しており、彼らの過剰な反応は確かに現実を反映しているのである。

4．宗派意識と階級意識

ここまでをまとめると、マコーレーの主張は次の二点に絞られよう。一つは理論的枠組みに関して、アイルランド問題には正統マルクス主義よりも修正マルクス主義を用いた分析が有効であるという主張。その根拠として、宗派と階級の相関が現在の北アイルランドでは成立していないことと、ユニオニスト・ブロック内の階級分裂を挙げている。そしてもう一つは、プロテスタント労働者階級のアイデンティティ形成には、宗派と階級の両方が大きく関わっているという主張。マコーレーが「修正学派」とはいえマルクス主義的解釈にこだわるのは、彼が階級に対するエスニシティの優越性を認めていないためだと思われる。つまり、プロテスタント労働者階級の集団帰属意識は、宗派およびエスニシティと少なくとも同等に、階級にも求められると彼は想定している。バリマック地区での住宅問題に対する住民の反応について、すでにみてきたように、彼は「階級意識と宗派意識は両立するのであり、住民の捉え方には二つが入り交じっていた」と分析し（McAuley　1994：136)、さらに結論においても「宗派主義は階級意識を否定するものではないし、またその逆もない。同じイデオロギー上に共存しているのである」と述べている（McAuley　1994：181)。

彼の議論からいえば、宗派意識も階級意識も共存するがゆえにどちらも一方を駆逐できるほど支配的になるとはいえず、宗派を越えた階級による連帯はもとより、ユニオニスト・ブロックの階級分裂によって宗派による連帯も当然のものと期待できないことになる。プロテスタント労働者階級はユニオニスト支配者の意のままに操られる道具ではなく、実際にはユニオニストの覇権を支配層と奪い合ってきたというのが彼の主張であった。しかし、英国政府がアイルランド問題の解決に向けて共和国政府の介入をはっきり認めて以来、将来の危機的状況に備えるというネガティブな反動からであるにせよ少なくともユニオニスト内部に表だった対立の動きは見られないのである。ＤＵＰ党内の保守的な「福音主義者」議員と労働者の支持する「草

の根活動家」議員との反目をマコーレーは強調するが、党が分裂をまがりなりにも免れてきたということは、プロテスタント労働者コミュニティが階級の利害よりも宗派の利害を重視してきたことを意味するのではないか。加えて、紛争の長期化・激化にともない、居住地区に限らず社会的に広範囲な宗派別棲み分けがすすみ、それはまた宗派間の偏見を限りなく助長し、さらなる宗派主義の普及に拍車をかけてきたのである。

では、このような宗派主義の高まりの背景には何があるのであろうか。ここでマコーレーによるプロテスタント労働者のアイデンティティ分析に立ち戻って、この問題について考えてみたい。

5．プロテスタント労働者階級のアイデンティティ形成

マコーレーによれば、彼らの集団アイデンティティを形成するイデオロギーは、宗派、コミュニティ、階級、そして国家の4つであった。この4つのイデオロギーは、多元社会で一貫した集団感情を呼び起こすとされるエスニシティと階級、そしてその発現の規模のレベルとしての、コミュニティと国家とに大別できる。しかし、ここで私が注目したいのは、宗派イデオロギーと国家イデオロギーとの関係である。先にみてきたような北アイルランドの「脱プロテスタント化」現象は、プロテスタント住民にとって、南の共和国によるアルスターの吸収合併を意味する。アイルランドが統一されれば、彼らはたちまち少数派に転落してしまう。英国との連合存続を望む北アイルランドの多くのプロテスタントにとって、自らの国家アイデンティティを英国に求めることは、ごく自然なことであろう。かくして、彼らは始終自らの「英国性」を強調し、本土（大ブリテン島）の英国人より英国人らしくあるよう努めてきたため、かえってそんな必要のない本土の英国人から「自分たちとは異質だ」とみなされてきたのは、皮肉なことかもしれない（Bew et al 1996：233）。ただ最近になって、度重なる英国政府の「裏切り」、つまりアイルランド共和国政府にアイルランド問題における発言権を認める方針によって、ユニオニスト側に、英国ではなく「アルスター」に国家アイデンティティを見いだそうという動きが見られるのは興味深い[3]。それでもユニオニストは北アイルランド独立案を南北統一への一歩とみるため、アルスター化には抵抗がある。

北アイルランドでは民族（nation）への帰属意識は宗派とほぼ一致しており、プロテスタントの過半数が自らを「英国人」と規定するのに対し、カトリックの方は明らかに「アイルランド人」とみなす人が多い。アルスターに帰属を求める場合でも、もちろんそこには宗派を限定しない「北アイルランド人」を想定するリベラルな人々も含まれるが、たとえば、強硬派プロテスタントが「アルスターの人々」というときには、実際はカトリックを含んでいないことが多い（McAuley　1994：179）。彼らは、カトリックは同じ北アイルランドに住むにもかかわらず、「アイルランド人」であるとみなすからである。宗派イデオロギーの強さは、国家やコミュニティといった他のイデオロギーと、容易に結びつくことができることにある。現実には、生活水準の低下を意味するため共和国との統一を望まない北のカトリックも多いが、プロテスタントの場合は多くが英国に国家の帰属を求めている。

北アイルランドにおける宗派は、対抗するエスニック集団の象徴として機能しているため、

信仰心よりも国家への帰属意識から生まれる、まさに宗派と混じり合った国家イデオロギーとして表出している。そして逆に国家イデオロギーの強さが、北アイルランドにおける宗教の世俗化を遅らせる要因として働いてきたのではないだろうか。つまり、プロテスタント労働者階級のアイデンティティは、まず「将来の国家的帰属の不安定さ」によって左右される、宗派イデオロギーと密接に結びついた国家イデオロギー、すなわちナショナリズムによって基底されるといえる。その国家イデオロギーは現在のところ、英国に求められるが、将来的に捨てきれない可能性として、彼らが英国に見切りをつけた場合には「(プロテスタントの) アルスター」という選択が考えられる。

ユニオニスト・ブロック内の反目は階級イデオロギーの残存を示してはいるが、エスニシティと違って、階級はコミュニティ・レベルに留まり、宗派を越えて拡大してゆくことはない。マコーレーの議論はユニオニスト内の階級分裂を強調するあまり、エスニシティが、特に対抗する集団による外からの規定を持つ場合、強い情緒的一体感を呼び起こすという特質を軽視しているように感じられた。脱産業社会における階級意識の低下については、階級闘争の制度化や労働者階級の量的な減少によって多くの学者に指摘されているところである。ベルは、エスニシティが突出度を増すようになった理由について、エスニシティが「利益と感情的紐帯とを結びつけることができるから」であり、「階級感情のこうした低減」が、「種族的な自己同定が台頭するのに結びついた要因の一つである」と述べている (Bell 1975＝1984：211-224)。

こうした理論は、エスニシティを、「さらに広い階級的脈絡のなかで説明されるべき要因として改めてみようとするだけではなく、むしろ、社会的分裂と政治的アイデンティティの主な形態として、現実に階級に取って代わった要因としてみようとする (Parkin 1978＝1989：78)」ものである。ただ、階級が脱産業社会でどの程度影響力をもつのかという大きな問題は、マコーレーによっても言及されている。バリマック地区は、伝統的な熟練労働者コミュニティではあるが、北アイルランドでは衰退する製造業に替わって、労働者階級地区における失業率の上昇とともに、(とくに公営の) サービス職への転換が起こっている (McAuley 1994：32-36)。労働者階級の結束力が弱まってゆく場合には、階級イデオロギーはいっそう影をひそめることになり、プロテスタント労働者階級の分析には、よりエスニック集団の心理的側面を重視した枠組みが適用されるべきだと思われる。

<註>

1　英国との連合存続を目指すが、「ユニオニスト」より強硬な姿勢をとる人々。しばしばプロテスタントのテロリストを指す。

2　1986-87年に、一家庭あたりの年収が4000ポンド未満であるカトリックは39%、プロテスタントが30%だったのにたいし、1988-1990/91年には、カトリックが30%、プロテスタント27%と格差が縮小している (PPRU Monitor、The Continuous Household Survey, *Religion Report*、No.1/93)。

3　マコーレーは、準軍事組織アルスター防衛協会 (UDA) が、プロテスタント側からのアイルランド史の「書き換え」を行っていたことや、メンバーが英国賛歌をアルスター賛歌の歌詞に変えて歌うようになっていたことを例に挙げている (McAuley 1994：92-99)。彼らは一時北アイルランドの独立案をうちだした際にアルスター化の姿勢を見せたのだが、これが労働者

コミュニティにどれだけ受け入れられたかについては、彼らの影響力の弱さからみて疑問である（Bruce　1995：126）。

＜参照文献＞

Althusser, Louis. 1970 *Idelogie et Appareils Idelogiques d'Etat* ＝1993 柳内隆、山本哲士編『アルチュセールのイデオロギー論』三交社。

Bell, Daniel. 1975 Ethnicity and Social Change, in Grazer, Nathan, and Daniel P. Moynihan eds., *Ethnicity：Theory and Experience,* Harvard University Press ＝1984 内山秀夫訳『民族とアイデンティティ』三嶺書房。

Bew, Paul, Peter Gibbon, and Henry Patterson. 1996 *Northern Ireland 1921-1996：Political Forces and Social Classes,* Serif.

Boyle, Kevin, and Tom Hadden. 1994 *Northern Ireland：The Choice,* Penguin Books.

Bruce, Steve. 1994 *The Edge of the Union：The Ulster Loyalist Political Vision,* Oxford University Press.

―――― 1995 Northern Ireland：Reappraising Loyalist Violence, in O'Day , Alan, ed., *Terrorism's Laboratory：The Case of Northern Ireland,* Dartmouth.

松尾太郎 1980『アイルランド問題の史的構造』論創社。

McAuley, James W. 1994 *The Politics of Identity：A Loyalist Community in Belfast,* Avebury.

O'Duffy, Brendan. 1995 Violence in Northern Ireland 1969-1994：Sectarian or Ethnonational?, *Ethnic and Racial Studies* 18 (4), Routledge.

Parker, Tony. 1993 *May the Lord in His Mercy be Kind to Belfast,* Harper Collins Publishers.

Parkin, Frank. 1978 Social Stratification, in Bottomore, Tom, and Robert Nisbet eds., *A History of Sociological Analysis,* Basic Books ＝1989 橋本満訳『社会階層論』アカデミア出版会。

関根政美 1994『エスニシティの政治社会学』名古屋大学出版会。

Solomos, John. 1986 Varieties of Marxist Conception of 'Race', Class, and the State：A Critical Analysis, in Rex, John, and David Mason eds., *Theories of Race and Ethnic Relations,* Cambridge University Press.